

教えの庭から

新装なった雲南市三刀屋

町の永井隆記念館を妻と見学しました。永井隆博士は、原爆で重傷を負いながらも献身的な救護活動をされました。さらに、病床にありながら、死の直前まで執筆活動を通じて、平和を訴え続けられました。この機会に、博士の著書『この子を残して』を再度読み返し、新たに感銘を受けました。とりわけ感銘を受けたのは、その本の「摂理」の章にある原爆についての博士の思いです。

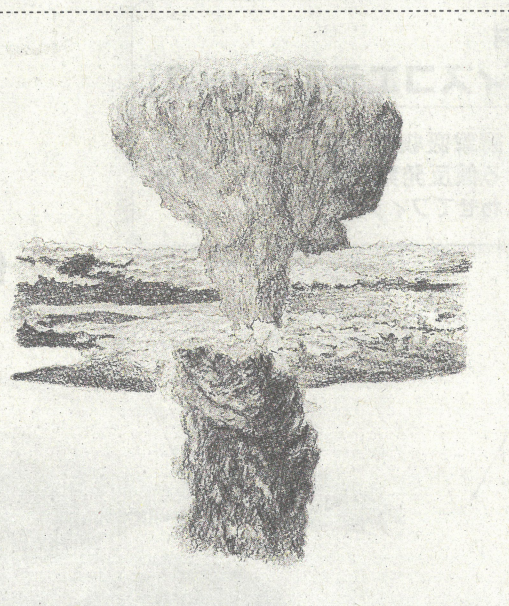
その章には、「…夜が明けてみたら修道女がひとかたまりになって、冷たくなっていた。…きよらかな死に顔が並んでいた。それを見た生き残りの私たちは、原子爆弾は決して天罰ではなく、何か深いもくろみを持

南無地獄大菩薩

出雲市斐川町・仁照寺住職 江角 弘道

持つ御摂理のあらわれに違いないと思った。…私も同じ日に、無一物の廃人となり果て、幼い二人の子をかかえて焼け野原にたたされたのだが、これは何かは知らねど、愛の摂理の表れで

ここに、多くの人を一瞬にして死に追いやった原爆ですが、「原爆によって真の幸福を味わえるようになつた」とあり、原爆投下を「深いもくろみを持つ摂理の表れ」と説かれました。宗教に深く帰依をされていた博士は、原爆という地獄を転化されて、「真の幸福」と拜んでおられるところに、大きな驚きと宗教の限りなき偉大な力を感じます。



挿絵 平尾恵郷

ある、と信じて疑わなかった。…原子爆弾によって私の正しい道をはばんでいた邪魔が取り除かれ、私は真の幸福を味わうことができると書かれています。

深い信仰をお持ちであった博士ならではの言葉です。さらに、「完全な幸福」の章には、「…原子爆弾を受けるには、災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。これはこれ災難をのがれる妙法にて候」と書かれました。ここには、災難を災難として受け入れて、それによって、災難を転じて生かしてゆくこととする生き方があります。臨済宗中興の祖とされる白隠禅師(1686〜1768年)には、「南無地獄大菩薩」と書かれた墨蹟があります。これは、「地獄大菩薩」に帰依(南無)してたてまつるという意味になります。これは、地獄の状態であるものを、南無地獄大菩薩と拜んでゆくところに、地獄を転じて行くものがあるということでしょう。

「観無量寿経」には、阿彌陀仏の光明神力により「地獄の猛火、化して清涼の風となり、もろもろの天華を吹く」とあります。「地獄の猛火」であったものが、「清涼の風」と転じてゆくのは、絶えず「南無阿彌陀仏」と称名念仏を続けることにあると説いています。良寛禅師(1758〜1831年)は、大地震に遭った知人に、見舞状を出されて、「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。これはこれ災難をのがれる妙法にて候」と書かれました。ここには、災難を災難として受け入れて、それによって、災難を転じて生かしてゆくこととする生き方があります。臨済宗中興の祖とされる白隠禅師(1686〜1768年)には、「南無地獄大菩薩」と書かれた墨蹟があります。これは、「地獄大菩薩」に帰依(南無)してたてまつるという意味になります。これは、地獄の状態であるものを、南無地獄大菩薩と拜んでゆくところに、地獄を転じて行くものがあるということでしょう。

地震のような天災であるならば、南無地獄大菩薩と何とか受け入れて、それを生かしてゆく生き方もできると思われます。しかし、原爆のような人為的災害の場合は、とても難しいと思われませんが永井博士は、「南無原爆大菩薩」として生かしてゆくことができました。